
2度目の人生

you

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

2度目の人生

【NZコード】

N4030Z

【作者名】

you

【あらすじ】

猫を庇つて死んだ主人公が転生先で色々するはなしです。

まじつか！

『おー田が覚めたか。』

そして俺の田の前にはよほよほな爺さんがいた。
なんで爺さんなんだよ・・・はあ、いつこいつ時は綺麗なお姉さんと
か幼女とかじやねえの？

『悪かつたなよぼよぼな爺さんで』

あれ？ 声にだしてたつけ

『まあ、わしは神だから心を読む』とべりこ簡単じや

まじつか！

「んで、何で俺はここにいるんだ？」

「それはお前が死んでしまったからじや

え？

「嘘だー！」

『本当じや・・・お前はトラックにひかれそうな猫をたすけて死んだのだ・・・』

はあ、まあこいんだけどそれ・・・まだやりたいーと一個だけあった
な・・・

『やりたい事とは？』

「プリンに醤油かけて食つてみたかった・・・

『・・・別にプリンに醤油かけたつてプリンと醤油の味しかしない
ぞ』

え？ まじで？ ならこいや。

つーか何で俺はこんなとこにいるんだ?

『そ、うじやつた・・・お前が助けた猫はわしのペットでな、たすけてくれたお詫びとして転生してもらおうとおもってだな。』

転生するのはいいがどういう世界なんだ?

『魔法のある世界じや』

よつしやあああああ!

めつちや面白そつやん!

『んで、転生する前に3つぐらじ願いを叶えてやるつてだな・・・ねがいはなんだ?』

願いか・・・

1つ目は身体能力をかなりあげてくれ

2つ目は魔力無限

3つ目は・・・あっちの世界に剣つてあるのか?

『もちろんあるわ!』

じゃあ3つ目は俺が刀になれと思つたら刀になれる木刀で・・・あ、絶対に折れないようしてくれ。

『わかつた・・・では転生をせるぞ!』

なんか・・・急に・・ねむ・・く・・なつて・・き・・た。

入学式（前書き）

生暖かい日でみてください

入学式

いやあ、無事に転生できたのは良かつたんだけじゃ……
赤ん坊からつてどうなのよ……ちなみに今は1歳ね。

「アルス～オムツ取り替えましょうね～」

2時間に1回オムツの取替にぐるりって……

「あうあああああ（やめて、俺のライフはもうつるだー）」

「これでよし！」

もうお婿にいけない……言ふ忘れてたけど俺の名前はアルス＝グランドっていうんだ

そういうや俺の絶対に折れない刀つてビニにあるんだろう……まあ今度でも探せばいいか。
はあ時間つてこんなに経つのがおそいんだな……

そして14年の月日がたつた

「アルスおきなさい！今日は入学式でしょ。」「へへい」

今日は有名なオアーズ魔法学園の入学式だ！

あ、ちゃんと受験はしたぜ……ぎりぎり合格だつたんだ……あと1点でも足りなかつたら落ちていた。

「早く朝ごはん食べていきなさい、遅刻するわよ。」「お、もうこんな時間が早く行かないよ。」

「いってきま～す」

そうそう、この14年の間に何を学んだかといつとだな、この世界の事と文字、魔法、
能力のことだ

この世界のことは・・・魔物がいるー詳しくはめんどくせーこので今度話す。

文字覚えるのは大変だったわ・・・地球の文字を知ってるからそれに慣れてしまって何回もまちがえたわ・・・覚えるのに10年かかったわ・・・

魔法には火、水、風、土、雷、聖、闇という属性があり、1人2つぐらい属性があるらしんだ・・・たまに3つ使いこなせる人もいるみたいだがな。聖と闇は特別みたいだ・・・くわしいことはわからん。

それと刀はまだ見つかっていない。どこにあんだけ！

スキルのことはだな、人一人には生まれつき能力が2つあってだな・・・1歳にはその能力のことについてわかるらしんだが・・・俺の
能力はまだわからない。なぜ？

そんなこんなで30分後

よし、ついた。ここがオアーズ魔法学園か・・・まあ、来るのは2度目だけどね！

ん？校門に新入生は体育館にお集まりくださいっていう紙が貼つてある。

とうわけで体育館につきました
校長先生の話がはじました

30分後

長いっ！

まあ、校長先生の話つてどの学校もながいよな・・・はあ、なんか
イライラしてきた・・・

さらに30分後

こんなに長く話してもまともにきいてるやつなんているわけねえだ
ろ！生徒のこと考えろよハゲが！

1時間後

「これで校長先生のお話を終わります。
やっと終わった・・・長い戦いだつた。（睡魔との戦い）

今俺は自分のクラスに向かっている。

この学園には、A～Eの5クラスあつて入試の点数が高い人順にA
～Eに入るそうだ・・・ちなみに俺は最下位だからEクラスだ・・・
実技さえあれば・・・

クラスに入つて自分の席に座り（窓際の一一番後ろ）ぼーっとしてい
る、いろんなとこから校長の悪口が聞こえる「あのハゲが」とか
「話し長すぎだらあの短足」とか「死ねくそじじい」とか「馬みた
いな顔しやがってとか」とか「胴長が！」とか・・・まあ、あんた
け長く話してれば嫌われるだろうな。

「席につけー」
ガラツ

女の先生が入ってきた・・・先生ちつちえーな・・・バゴッ！・・・頭をファイルで殴ってきたしかも角で・・・何で？

「今、先生ちつちや！って思つたでしょ？」

「イイエ、ソンナコトハアリマセン」

「そう？」

いてえ、なんで思つたことがバレるんだよ・・・顔にでてたか？・・・クラスのみんながドンマイつて感じで俺を見てくる・・・

「私はミカ＝スイツといいます。趣味は読書で、好きなモノは牛乳です」

牛乳か・・・ミカ先生がこっちを睨んできた・・・」ええええ

「じゃあ一番右前の席の人から自己紹介してください」

・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・

・・・やつと俺の番だ。

「俺の名前はアルス＝グランド、趣味や好きなモノは特にあります

ん

「全員自己紹介終わりましたし、今日はここで終わりです。明日からはちゃんと授業に入ります忘れ物はないようにしてくださいね。それではさよなら」

やつと終わったよ・・・ヒューか、まだ頭が痛いんですけど・・・どんだけ強く殴つたんだよ。

あ、ちなみに俺の帰るとこりは学生寮だ。家からだと40分かかるからな。

さてと、寮に行くとするかな。

「おお！」

自分の部屋についた俺は思わず大きな声をだしてしまった・・・結構広いやん・・俺の部屋より広いぞ！

しかも、一人部屋だぞ！最高だ！・・・と感激していたらいつの間

にか23時58分になっていた。・・時間が経つの速いな。
よし、目覚ましもセットしたし、寝るか

入学式（後書き）

アドバイスをください

魔力検査（前書き）

馱文

魔力検査

「ん・・・朝か・・・」

卷之三

「イヤ！」

「一耳金が立つ二耳金」からめでたしめでたしでかい男の声が聞こえる

あつたあつた・・・これでよし

「人間の心」の歴史

イライラしてきた・・・

「…でけえ声たすな！！」

バンツ

「...」

ねえか！」

な。

ドガツ

卷之六

「あ、ありがとうございます」

「どういたしまして・・・俺はアルス・・・お前は？」

「私はアリス＝ミザールといいます」

「よひしく！」

「よひしく／＼／＼

アリス・・・アリス・・・あ！

「お前、一番最初に自己紹介した？」

「はい！あなたは最後に自己紹介をした人ですよね？」

「おお・・・覚えていてくれたか！」

「こんな可愛い子に覚えてもらえるなんて感激だ！」

「ちなみにアリスの容姿はアマミの咲に似ている。

「もうそろそろ時間ですし、いつしょに学校行きませんか？」

「よひしんで！」

5分後

俺は自分の席で授業始まるまで寝ること・・・

ガラツ

「欠席はいませんね・・・いまから皆さんの魔力量を測りに行きますので体育館に来てください」

寝れなかつた・・・

ドンッ

誰かがぶつかってきた。

「おースマン！」

「いらっしゃこそ・・・」

「お前って最後に自己紹介した「あの」アルス？」

「ん？あの？」

「そうだが・・・「あの」？」

「ああ！自己紹介で唯一つまんなえ自己紹介した「あの」アルス！」

「そんでもって・・・女子からかなりモテる「あの」アルス！」

「あ、自己紹介に面白さ求めてどうすんだよ・・・」

「え？ああそなんだ・・・」

聞いてなかつた・・・

「俺はアレックス＝メラクよりしくー自己紹介で話したと思つが趣味は美人探しだ！」

まじか・・・

「・・・よろしく」

「早く体育館いこづぜー！」

「おお・・・」

体育館

「全員揃いましたねー・・・では出席番号順に魔力を測つてください。

ちなみに自分がどの属性かもわかりますよ。ちなみにランク付けしますからね」

俺は出席番号は2番だ。一番はアリストだ。3番はアレックスだ
「このボールに触つてください。このガラスのボールはその人の属性に反応して色を変えます。

火だつたら赤

水だつたら青

風だつたら緑

土だつたら茶

雷だつたら黄

聖だつたら白

闇だつたら黒となります」

アリスがボールに触れた・・・ボールが赤と青に変化した。
てことは火と水の属性か。ランクはB

次は俺だな・・・俺はボールに触れた。

ボールがいろんな色に変化した・・・そして
ドガアアアアアアアアアアアアアアアアアアア
アアアアアアン

みんながありえないって目で見てくる。

そりやそうだ・・・俺、魔力無限だし・・・

「ええと・・・Aランクです・・・」

「次、アレックス君」

「お前すげえな！全部の色に変化したし・・・しかもボールを壊す
なんてすげえ！」

「せんきゅ！」

そして魔力測定が終わった。

ちなみにアレックスの属性は風と土だ・・・ランクはD

「次の時間は・・・身体能力とスキル、どんな攻撃魔法が得意か見
ますのでグラウンドに集まつてください」

身体能力と自分の能力か・・・

身体能力は別にいいとして・・・はあ、スキルか・・・まだ1個も
見つかっていないのに・・・

俺はグラウンドに向かう途中いろんな人に「何でそんなに魔力が高いんだ！」とか「何で全属性がつかえるの？」とか・・・いろいろ聞かれてしまい授業に遅刻してしまった。

魔力検査（後書き）

編集しました。

身体能力測定

「全員そろいましたねー・・・これから身体能力測定をします。」

身体能力か・・・どんぐらいあがつてんだろう。

「もうすこしで担当の先生が来ますので・・・」

「あ、あれが担当の先生・・・か？」

アレックスの顔が一瞬にして青くなつた。

俺も担当の先生をみてみると・・・やべえ吐きそうだ。

「俺が身体能力測定担当のジョニー・レックスだ！」

ムキムキな上にTシャツ一枚だ。しかも顔・・・

「これから俺と戦つてもうう！勿論武器や、魔法の使用はなしだ！」

俺がクジを引くから呼ばれたら前に来て

それ以外のやつは少し離れてるみたい・・・ランクはもちろんつけるぞ！」

え・・・戦うの？・・・あんなやつと？

アリスの方を見ると涙目になつて俺の袖を掴んできた。

「では、最初はアリス＝ミザール」

「・・・頑張れ」俺

「・・・生きて帰つてこいよ」アレックス

「・・・うん」

「初め！」

アリスが先生に向かつて走りだし殴りかかつた。

それを先生は避けて足払いをしようとしたが、アリスがジャンプして躲し・・・

「・・・結構飛んでるな」アレックス

「すごいジャンプ力だ・・・俺

アリスはすごいスピードで落ちたしかも連續でパンチをしながら

「おお！手が16個も見える！」

「すげえ・・・俺もできると思うけど・・・まあ、先生はそれを躲したが・・・」

「アリスってあんなに強かつたんだ」

「アリスはこの学園に入つて大会にでるため修行してきたからな」

「お前とアリスって知り合いだつたのか？」

「ああ、幼馴染だ！」

「そうだつたのか・・・」

「つーか、大会ってなんだ？」

「知らないのか？・・・クラス対抗オアーズ武闘大会つてのがあってだな

「1年生でトーナメント形式で戦つていつて優勝したら2年生の大会にでて

「さらに優勝したら3年生の大会に出れる。しかも一般の客も見に来れるらしいぜ」

「うわっ、めんどくさつ！」

「でも、優勝賞品はすげえぞ！1年の優勝賞品はかなり豪華な寮の部屋（大会に出場した人にだけ）で、

「2年の大会では一人200万、3年では500万だつてさなんだつて」

「まじか！ぜつたい優勝するぞ！」

「ちなみに出場者人数5人までだ。出場条件は身体能力測定かスクリューテスト、魔法測定」

「・・・もうすぐでアリスの戦いが終わるぞ」 アレックス

「しまった！話に夢中で見てなかつた！」 俺

アリスが先生に向かって回し蹴りを放つたが足を掴まれて地面にたたきつけられた。

うわあ・・・痛そうだな・・・

「終了だ！・・・ランクはCだ！」

「お疲れ様」

「Cランクなんてすごいじゃないか！僕は絶対DかEだよー」暗い顔で戻ってきた

「まけちゃった・・・」

アリスが深いため息を付いた。・・・そりゃあそุดらうな修行してたらしいし。

「まあ、先生が相手だつたしね」

「次！アレックス＝メラク！」

「うげえ、俺かよ・・・」

「まあ、遅かれ早かれ来ることだし・・・頑張れよ！・・・

「頑張つてね！」

「はあ・・・いってきまーす」

「初め！」

アレックスが先生に向かって走りだし・・・た・・・すげえ速い先生に向かって連続でパンチは放つ・・・先生はそれを片手で受け止めている。

「すごい速さだな・・・しかもあのパンチ・・・」

あのパンチはこのクラスでも数人にしか見えていないと思うぞ

「アレックス君は武闘大会に出るためにずつと50キロの重りを

両手両足につけて修行してたんだよ・・・そのパンチを片手で受け止めるなんて・・・

「先生ってどんなだけ強いんだよ・・・」

「はっ！」

先生が足払いをしたがアレックスはそれをジャンプして躲し空中で一回転し、アレックスがかかと落としをした・・・先生足払い好きだな・・・

「おらあ！」

ド「オオオオオオオオオ・・・砂煙でアレックスと先生が見えない

砂煙が晴れてきた・・・クレーターができている・・・まじか！
先生はだいじょうぶなのかよ・・・

アレックス side

「すごい力だなー」これは俺よりもすごいんじゃないかな！
手をクロスしてガードしやがったのか・・・一応僕の本気なんだけどな・・・そんなことより！

「まだまだいきますよ先生！」

「いや・・・試合終了だ！」

「え？ なんで？」

これからがいいところなのに・・・

「これは身体能力測定だ！俺を倒すことが目的ではない！
それとお前のランクはAだ！」

「よつしゃ～！」

「ただいま」

アレックスが笑顔で帰ってきた

「おつかれ！」

「アレックス君すごいね！」

「まさか本気のかかと落としをガードされるとは思わなかつたよ
それに骨にひびすらはいつていないとは・・・次からは重りを100
キロにするかな！」

「次！デイラ＝フルド」

「はい！」

「おお！あの子可愛い！ツインテールだ！」

そういうやこいつの趣味つて美人探しだったな・・・

「初め！」

デイラが開始の合図と同時に分身した・・・しかも8体

「分身？」

「ものすごい速さで動いてるんだろうな・・・アレックスも
もうちよじ速くなればできるようなると思ひや」

「おお！まじか！じゃあ帰つたら早速100キロにして修行するか
な！」

8体のデイラが先生に向かつて右ストレートを放つ・・・当たつた！
8体のデイラがアッパーを決めようとしたが先生に手を掴まれた

「な！」

デイラが驚いてるようだ・・・

「終了だ！文句なしのAランクだ！」

「あいつすげえな・・・」俺

「強くて可愛いか・・・最高だ！」バカ

「試合開始1分で終わつたつて・・・」アリス

「まあ、先生に一発当てたしな・・・」俺

「私は全部躱された・・・」アリス

「でも僕は黒髪ロング派だな」バカ

「おい、バカ・・・アレックス、トイレ行こうぜ」

「いまバカつていたる」

「いつてねえよ・・・早く行こうぜ」

「・・・おう」

「次！アルス＝グランド！お前は最後だからどちらかがダウンするまでやるからな！」

俺は最後だつた・・・ちなみにクリス＝アルタイルつてやつ以外全員瞬殺だつたらしい・・・

らしい・・・つていうのは俺らがトイレに行つてる間に全員終わつたから見ていないのだ・・・

つーか、まじかよ！どちらかがダウンするまでつて・・・めんどくさ

「はあ・・・いつてきま～す」

自分の身体能力は50%の力を出すとただのパンチでクレーターが出来るレベルで

走つたらよほど強い人じゃないと俺は見えないレベルらしい・・・なぜわかつたかというと

トイレに行つてる途中神の声が聞こえて説明してもらつた。ちなみに

にもう神は俺に話しかけれなく
なるらしい・・・別にどうでもいいけどね！爺なんかと話したくな
いし！

「ドンマイ！」
「頑張つてね！」

「初め！」

20%ぐらいの力で行くか

俺は先生に向けつて飛び膝蹴りを放つた。

「な！」

先生はそれを慌てて躲した

まあ・・・かなり速いしね

俺はすぐに先生の懷に潜り込んで連続でパンチをくらわせた。

「がはっ・・・」

先生はすぐに回復したらしく俺に殴りかかってきた。結構速いな・・・

俺はバックステップで避けたが・・・先生がすごい速さで俺に蹴り
かかってきた

「はやっ！」

「はっ！」

スカッ・・・

アレックス side

アルスってあんなにつよかつたのか・・・しかもあの速さ・・・目
で追うのがやっとだ。

「はやっ！」

「はっ！」

先生もかなりの速さでアルスに蹴りかかった・・・さすがにあれは
アルスでもかわせないだろ・・・

スカツ

「え？」
僕・アリス

—なつ！

残像！」

卷之六

みんな不思議がつてゐる

「上だああああああああああああああああああああ！」
アルスがかかと落としの構えをしながら落ちてくる。

アルス side

「上だああああああああああああああああああああ！」
ドガアアアアアアアアアアアアアアアアアアアン！」

「ふう・・・倒せたか・・・最後の蹴りのところは少しだけ焦つたな。

先生は氣絶したみたいだ
・
・
・

二〇一〇年

・・・なんだ? ちょっとビクつてしまつたじゃねーか

「アルスすげえよ！つーか何だよあれ・・・」「アルス君先生を倒すなんてすごい！」

ああ、倒したからみんなあんな声をだしたのか

「ありがとう！あれつて？」

「先生が最後に放った蹴りをすり抜けたる！」

「あれは残像だよ・・・高速で動いただけだ」

「動いただけだつて・・・」

「デイラってやつは残像つてわかつたみたいだね・・・みんなより

早く気づいて俺が「上だ」つて叫ぶ前から上をみたし

・・・

「そりか・・・」

「アルス！俺に修行つけてくれ！お願いだ！」

「アルス君！私もお願ひ！」

修行か・・・放課後ならすることもないし・・・よし！

「放課後でいいならいいよ！」

「「ありがとう…」」「

「アルスさん！私もみてもらつていいかな？」

ん？デイラが俺に頭を下げて頼んできた・・・別にさげなくていいのに

「多分俺の修行はつらいや・・・それでもやるっ！」

「やる！」

「ならないよ！」

「やつた～！」

「すごい喜んでる・・・修行はじめたら後悔するだらうな・・・

「・・・私にもお願ひ」

次はクリスか・・・まあ、いいか

「いいよ…」

「・・・ありがと

「僕／俺／私にもお願ひ

三

•
•
•
•
•
•
•
•
•
•
•
•
•
•

無理！」

「……………」

卷之二

「 そんなん

卷之三

お！先生が起きたみたいだ

先生アステラが

アリス……おまえは今、まだ……まだが活潑していたとは
いえ俺を倒すとは

「まあ・・・まだ20%ぐらいしか力は出していませんよ。」

一
え?
」

あれで20%以上。。。

アレツクスたちを含む全員

はるかにやがんばります。人語で「実力があるから」といふ

やつぱりか・・・なんで実技がねえんだよ・・・

身体能力測定（後書き）

戦闘描写・・・アドバイスください・・・
そしてだれかいい能力を考えてくれ・・・
「解析【アナリシス】」みたいな感じで

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4030z/>

2度目の人生

2011年12月16日22時54分発行